

こぼれ話6

たぎびの詩人巽聖歌と宮沢賢治

「はい、賢いあんが読んでくださいますって」。大正十四年の初夏、二十歳の巽聖歌は、文学仲間の高橋与惣吉から、宮沢賢治の詩集「春と修羅」と童話集「注文の多い料理店」を渡されます。

宮沢賢治の存在を知らなかった聖歌は、作品を読んで衝撃を受けました。方言で書かれた作品が、世の中に受け入れられるだろうかと懸念を抱きつつ、賢治の童話は必ず有名になるだろうと思っただと書いています。

聖歌の出身地・岩手県紫波町と賢治の住む花巻はすべ近くで、そのころ東京で児童雑誌の編集者として仕事をしていた聖歌のことを、賢治は知っていたようです。どんな人かという聖歌の質問に、高橋は「ほとけさまのような人だ」と答えたそうです。その後の二人の交流は分かりませんが、聖歌は賢治のことをテーマとした詩を数編書いていますし、昭和三十六年、新潮文庫『宮沢賢治童話集』の編集をしています。



▲20歳の頃の巽聖歌（最後列中央）